

Fate/Grand Order 並行世界戦闘攝理解析システム#コンパス

星の開拓者

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

これは、あり得ざる特異点であり、あつてはいけない異聞帶——本来ならば英靈になり得ない者たちが集い、殺し合う物語。

英雄になりたかつた「誰か」の物語——。

※コラボヒーロー有り

※FGOの第二部をある程度まで進めていると理解しやすいです

※独自解釈あり

※STEINS;GATEのネタバレあり

※進撃の巨人のネタバレあり

プロローグ

intro.

1 目

次

1

プロローグ　intro. 1

「令呪を持つて命ずる——」

宙に浮かんだ男が、告げた。

「セイバー、アルトリア・ペンドラゴン——
アーチャー、ギルガメッシュ——
ルーラー、ジャンヌ・ダルク——
ライダー、ニコラ・テスラ——。」

「互いが死ぬまで、殺し合え。」

悪夢のような殺し合いは1週間続いた。人類最古の英雄王、ギルガメッシュが生き残り、その彼もまた、令呪によつて自害するよう命じられてしまった。

他にも召喚されたサーヴァントはたくさんいたが、争いに巻き込まれまいと逃げるもの、その恐ろしさに動けなくなるもの、さまざまだつた。しかし、その場にいる誰もが理解していた。「この殺し合いに巻き込まれたら、確実に己は死ぬことになる——」と。

——
「相棒、あいや、マスター。お前さんも未恐ろしいこと考えるね。」
隣にいた男が告げた。彼は、僕と契約している唯一のサーヴァントだ。

「一体なんのことかな。」

「あいつらの殺し合い、なかなか見ものだつたぜ。見せ物としては完璧すぎるくらいだ。もつぱら、俺は巻き込まれるのはごめんだけどよ。」

——しかしマスター、お前さんの行動力つてか認識力つてかスゲーよな。この世界に召喚された瞬間に、すぐに状況を把握し、一番厄介な敵勢力になるであろう奴らをすぐに見抜いて、殺し合いをさせる、だろう。おまけにVoid011の電源ボタンまで落としちまつてよ。」

俺が落としたかつたのにな、ちえつ。と隣の男が悪態をついた。

「この戦争で最強クラスのサーヴァントが互いに殺し合う——見せしめには丁度いいだろう。そして、そんな催し物をやつていたら、V.O.i.d.011が止めに来ることは容易に想像できたからね。その隙をついて電源を落とせば簡単な話さ。」

僕は彼に種明かしをした。彼は口角を下げる表情をしていて、いかにも納得をしていないようだつた。

「でもまだV.O.i.d.011はこの戦争から消えたわけではない。あくまでアルトリア、ジャンヌ、テスラ、ギルガメッシュの4人が消えただけだ。令呪もこの通り使い果たしてしまつたしね。他にも問題は山積みなんだ。」

「まあ、ソルのジジイとか、忠臣とか、クソチビ兵長とか、マリアちゃんとか、強えーのは腐るほどいるしな。マルコスなんかも頭がいいから隅に置けないぜ。」

「その中だと、リヴァイ・・・彼の戦闘力は確かに厄介だな——。でもねアサシン、他に厄介な奴はいる。そしてそれは、僕にとつて最大の脅威になりうる。」

「あア……岡部倫太郎、だつたつけ？ アイツ、そんなに強そうに見えないけどな。」

「確かに、彼はサーヴァントとしては未熟で貧弱だ。では逆に質問をしよう。なぜ僕は彼をここまで問題視すると思う？」

隣の男はわざとらしく考える素振りをした。

「ううん、俺ちゃん的にはばしゅつと一発ぶち込めばすぐに殺れると思うんだけどな。」

「考える気ないだろ、アサシン。まあいいや。答えを言うとね、岡部の持つ宝具にあるんだ。」

「うーん、俺ちゃん天才すぎていまいちピンと来ねえなあ。説明プリーズ。」

「僕の見立てでは、彼の宝具は『時間を超越する』、最悪の場合『世界を再構築する』くらいの能力がある。最もなぜあんな貧弱な靈基の人間が、そこまで大層な宝具を持っているのか、よくわからないんだけど。」

僕は軽くため息をついた。

「まあ、その岡部つて奴を見つけたら、俺ちゃんがザクつとばしゅつと殺つてしまえば、万事解決、つてところか。」

あ、てかマスター、お前が殺せばいいじゃん。」

アサシンは指で銃を作り、ばーん、と打つ真似をした。
「何を言つているんだい。僕は手を汚すつもりはないよ。そういうのは君の仕事だろ？」
「ふーん…。」

僕は世界を変えられると本気で思つてゐる。そのためのカードは、既に揃つてゐる。この世界に根付いてゐる空想樹。「彼」が用意した聖杯。そして「僕」が用意した蜘蛛の糸。白紙化してしまつた世界を、この電腦世界で上書きすることによつて救うのだ。そうすればこの世界を作つた「彼」だつて報われるのだからーー。

あれ、これは僕の意思？

「おーい、マスター？」

それともこれは「僕」の意思？

僕は一体誰と話していたんだつけ。

「彼」つて誰だつたつけ？

「どうしたの、アサシン。」

「お前、今ニヤけてたぞ。」

笑う？この僕が？

笑うなんて、いつ以来だろう。

その瞬間、かつての仲間だつた人たちの笑う声と、僕を呼ぶ声が蘇つてきた。

これは「僕」の記憶？それとも「彼」の記憶？

まあ、どつちだつていいんだけど。

でも、そうだ。この戦争は、ほとんど僕に勝利が約束されたものであつて、世界は、もうじき「僕」のものになる。

「彼」の苦労と犠牲にしてきたものは報われる。それならば。

「そうかい。でもなんでもないよ。アサシン、僕たちもそろそろ行動

を始めないとね。」